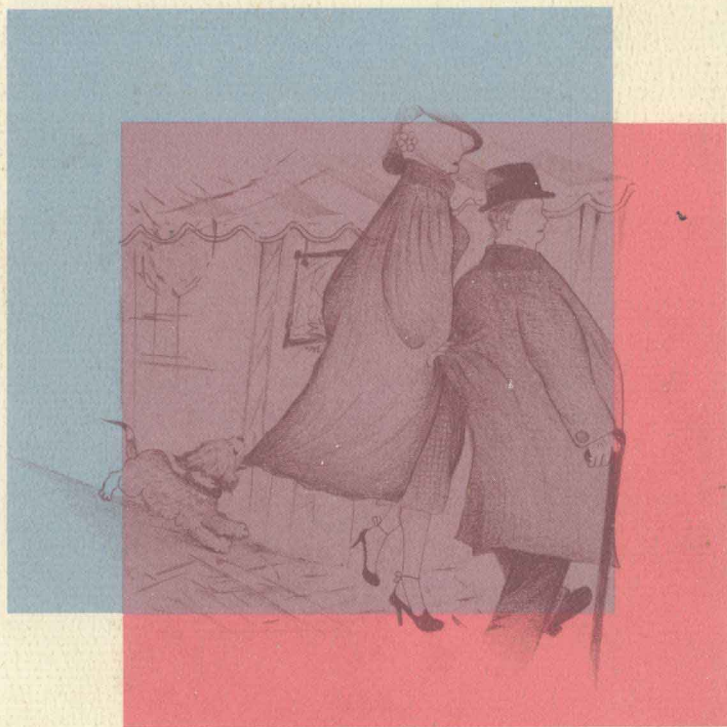


オトコ通り八丁目

中村メイコ



集英社

オトコ通り八丁目

中村メイコ



集英社

オトコ通り八丁目

一九八七年一月二五日 第一刷発行

定価 八八〇円

著者 中村メイコ

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一

出版部 (〇三)二三〇一六一〇〇
電話 販売部 (〇三)二三〇一六一七一

製作課 (〇三)二三〇一六〇八〇
印刷所 図書印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。送料は小社負担でお取り替えます。本書の内容の一部または全部を無断で複製、複製、転載することを禁じます。

© 1987 M. NAKAMURA Printed in Japan
ISBN4-08-772627-4 C0095

目

次

オトコ通り八丁目

笑う男 笑わない男	7
恥じらいと恥しらず	14
ひといろの涙	22
男の怒りはジキルとハイド	31
背中あわせの嫉妬と羨望	38
ギザギザハート	45
顔で笑って、心で泣いて	53
マルコ・ポーロ以来の冒険心	61
でっばっている性は単純	68
ホラ吹きと嘘つき	76
年齢、それなりの味わい	83
食べ物へのこだわり	90
フレ、フレ、ビーンズボーイ！	98
プッツン男、オンパレード	106

酒とマナー違反 113

不倫とプリン 122

処女願望VS童貞願望 134

エレキに強い男に脱帽 140

男のダンディズム 148

無口な男のしゃべり哲学 156

マナーとマンのいい関係 165

単身赴任は老後のリハール 174

孤独な老後に乾杯 183

男・番外編——オカマちゃん 192

あとがき 202

母の宣戦布告 神津カンナ 208

カバ
カ
ット
装
丁
岡
邦
彦

沢
登
み
よ
じ

オトコ通り八丁目

笑う男 笑わない男

正月は男が笑う季節である。

外で愛嬌のいい営業マンも俳優もコメディアンも、家に帰るとでがらしになっていて、女房の前ではにこりもしない。女は主婦になったとたん、笑わない男とつき合わされることになるのである。ところが、そんな男たちも正月ばかりは、朝からニコニコとしている。

「ようこそいらっしやいました。いい正月ですなあ」

と、じつにいい顔で笑うのである。自分の顔を知っていて笑うものだから、笑顔がくずれていない。クチャクチャにもならないし、だらしない。男が儀礼的に笑うときは、名刺のようなきちっとした笑顔になるのである。一年じゅう正月だったらいいのにと、そんな男の笑顔に接したとき、女たちは思うのである。

日本の男は概して笑わない。政治家などカンラカラカラと笑えばよさそうなのに、むっつりしたままだ。国民性もあるのだろうが、アメリカの政治家がよく笑顔をみせるのとは対照

的である。レーガン大統領など、さすがに元俳優だけあって、笑顔の作り方も堂に入ったもので、薄気味悪いジイサン顔の年のはずなのに、あのシワをじつにうまい笑いジワにもっていている。俳優のテクニクなのだろう。

カーターさんの人なつっこい笑顔もよかった。ただ、歯が少し目立ちすぎるのが難で、あれでは歯医者者のポスターである。

日本の男が笑わないのは、笑わないというより笑えないのではないだろうか。笑うと男の沽券にかかわる、威厳がなくなってしまうから、女房あたりが、

「ねえあなた、聞いて、すっごくおかしい話があるの……」

としゃべっても、

「なに、それでその話は終わり？ 別におもしろくないじゃない」

クスリともしないというのである。憎らしいかぎりだ。あれで、ほんとに案外おもしろいと思っっているのだ。だが、沽券にかかわるものだから、心のなかで笑っているが、顔では笑えない。顔で笑って心で泣いての逆をいくのが、日本の大半の男なのだ。ああいった男のあまのじゃく、いや、むしろ強がりの幼児性をかわいらしいと思わなければ、女はやつてられない、一緒に暮らしていけない。

また、育った環境の貧しさが、笑えない男を作る場合もある。とくにこの国ではその種の

男が多い。ひどく頑固で厳しい父親がいて、しょっちゅうビクビクとその父親の顔色をうかがって大きくなった男など、代表例だろう。

女は男に笑ってもらいたいときがある。それも、男からみれば、意外となんでもないときに笑ってほしいのである。たとえば、久しぶりに男友だちに会ったときなどがまさにそれで、会った瞬間にニコツとしてほしい。その笑顔で、きょうのデートが何かとつてもいいものになる予感がし、心が浮きたつのである。ところが、たいがいの男は、別に考えごとをしているわけでもないのに、足を組んで、みけんにシワなどよせて、たばこをくゆらせ、女を待っているのである。そのままのむずかしい顔で、こんちは、といわれれば、呼びだして悪かったのかしら、という気になってしまう。

しかし、男たちは女の前でめったに笑わないからこそ、笑ったときは、ほんとうの意思表示をしているわけで、価値があるともいえる。にこつとしてくれると、あの人はわたしに心を開いてくれたな、好意をもってくれたな、と女には感じられるのである。とくに日本の女の場合は、足を踏まれても笑顔を作るし、とにかく人と会えばにっこりなのだから、その点、男の笑顔のほうが価値があるようにも思える。

ただ、男のなかには笑ってごまかすという手があるから、気をつけなければならない。

「あなた、いま浮気してるでしょ」

といったとき、男はまずかならず笑う。

「ばかな、またそんなこといつて、ハハハ」

あんな無邪気に笑ったのだから、だいじょうぶだろう、などと思うと大間違いかもしれない。女にとっては、要注意である。

女として笑ってほしくないときに、男が笑う場合もある。それは、女が判断をおおいだときに、男がヘラヘラする場合で、

「あなた、どうしたらいい？」

こんなとき、へんな愛想笑いをしてから返ってくる言葉は、あまり重みがない。一瞬、ウツと考えてから、答えてほしいのである。

笑顔がサマになっているというのは、男にとっても女にとっても、とてもだいじなことだ。笑顔に、その人の品性、生活、文化、そして育ちもすべて出てくる。とくに男の場合は、女と違つかこいがないぶん、すべてが出てしまう気がするのである。女なら、化粧や、あるいは、後天的に習いおぼえたテクニクで笑いをごまかすことができる。口もとをかくして笑う仕草なども、そのひとつだろう。しかし、男が口もとを隠して笑ったら、ゲイバーの方になってしまう。男の笑いには、気の毒なことに、かこいがないのである。

かこいのない笑顔で勝負しなければならないのだから、男はたいへんだろうが、そのぶん、観察する者にとっては、その人の品性をてっとり早く見やぶることができて、便利といえば、便利なのである。

ではここで、笑顔のサマになる人を俳優のなかから探してみよう――。

わたしが好きだったのは、死んだ三波伸介の笑顔だ。それこそ、漫画のお日さまのような笑顔で、それも非常に安易で、安っぽくて、わかりやすい、どこにでもある漫画のお日さま……天下一品の笑顔だった。

グステイン・ホフマンの笑顔も最高だ。ともかくいい。無条件にいいのだ。

笑わない男の代名詞に使いたいような高倉健も、ほんのたまに笑ったときは、色気がある。口がちよっぴりまがり、色気がただようのである。男の色気のある笑いには、なかなかお目にかかれないもので、その意味でも、高倉健の笑顔は貴重だ。

そして、かこいのもてない男としては珍しく、研ぎすまされた美しい笑顔を見せたのが、長谷川一夫だった。華やかに、きれいな花のような笑いだった。天性の美貌もあるだろうが、それだけでなく、笑いのトレーニングを重ねて生まれたのではないだろうか。長谷川一夫は、笑いひとつとってみても、根っからの役者だったのである。

いっぽう、笑わない男の代表で、しかもそれがサマになっている俳優もいる。田村正和な

どそれにあたる。正和がしじゅう笑っていたら、あの二枚目の役にまったくそぐわない。藤竜也なども、その仲間だろう。

母によくいわれたものだ――。

「きょうはお客さまがみえるのだから、少しお品をよくしなさいよ。笑うときは、ホの段活用よ」

ホの段活用、つまり、ホホホ、そしてフフフの笑いなら、かわいらしく映るというのだ。への段活用で、へへへ、ヒヒヒでは、下品になってしまう。

その伝でいけば、男の場合はとにかく、ハの段活用がいい。ハハハと笑える男はステキだ。これが、ヒヒヒと笑えば、下心がありそうだし、フフフでは幼稚だ。男は、ハの段活用、そして、その上に「ワ」と小さな「ツ」がついてもいい。ワツハツハと豪快に明るく笑ってサマになるのは、男だけの特権だ。

しゃべることと笑うことは、とても似ていて、ほとんど一体ではないかとさえ思えるくらいだ。おしゃべりにしても笑いにしても、それを表現することで、その人物の中身がバレてしまうところがある。

どんなにスマートな服に身を包み、また、にがみばしつたい男だって、口を開いたとた

ん、薄っぺらで、頭がよくないことが出てしまう男がいるように、笑ったその表情で、いわゆるお里が知れてしまう男がいる。だから、自信がなくて、それでいて、恰好をつける男は、むっつりと黙りこくり、そして笑わないのではないのだろうか。

笑わないで、構えている男というのは、大したことはない、中身がない——そう思っただけ間違ったんだろう。

とにかく、自信があつて、恰好をつける必要のない男は、おしゃべりもできれば、笑うこともできるのである。

わたしは、子供たちにも、おもしろい話を聞いたら、反応しなさい、大きな声でワハハッと笑いなさい、といっている。そのとき、男でも女でも、なるべく美しい笑顔を心がけなさい、と。

男が笑ったら威厳がなくなるとか、沽券にかかわるとか、そんなつまらない考えは捨てて、えらい人ほどハハハッと歯を出して笑える——これからの日本人は、そんなふうになつてほしい。笑うことが、男のひとつの価値として定着することを望んでいる。なぜなら、男の笑顔は、それほどチャーミングなものなのだから。そう、毎日がお正月のように、女房の前でも笑顔をみせてほしいのである。

恥じらいと恥しらず

男は、生まれおちた瞬間からテレている動物なのではないだろうか。母親から生まれたときに、すでに非常に恥ずかしかったにちがいない。

野坂昭如さんが、「女は男のあばら骨からできているのだから……」とテレビで発言し、物議をかもしたことがあったが、男はもっと恥ずかしい思いを最初にしてしまったのである。そのために、男の中には先天的な恥じらいというものがある。テレとか恥じらいが背広を着て歩いているのが、男なのである。

そして、「おれはえらいところをくぐり抜けて誕生したんだぞ」との思いが、崇高な女性崇拜につながるか、逆にそれがねじれた形で女性蔑視となるかのどちらかだ。男は、この二種類に分かれるのである。

女は、自分ももっている器官から生まれる。だから、恥の度合いも男とはちがう。子宮をもっていて、出産をし、母乳で子供を育てる。産婦人科の内診台なんてもんにも平気で乗れ